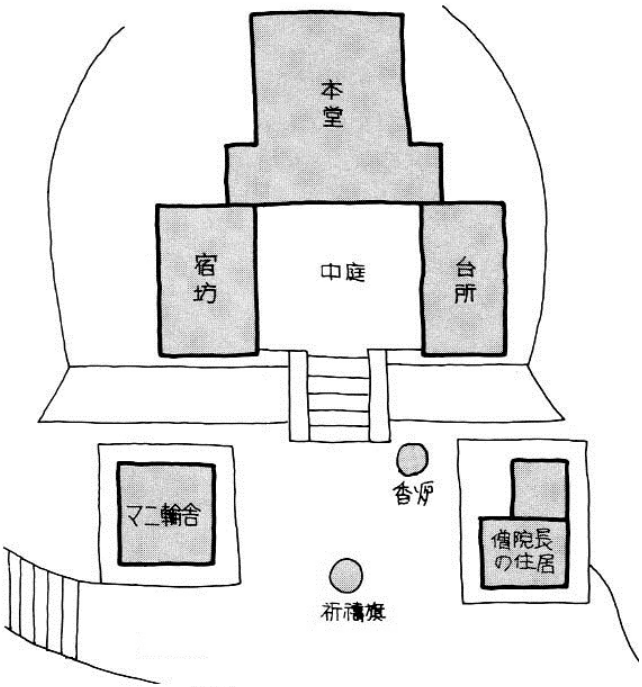
ネパール 仏教寺院

この展示は、ネパール東部、標高約 3000mのヒマラヤ南腹にあるチベット仏教のニンマ派に属する、タキシンド寺院をモデルに復元したものです。

タキシンド寺院の本堂には釈迦如来を安置し、周囲の壁や天井にはチベット仏教独特の仏画や曼荼羅が極彩色でびっしりと描かれています。敷地内には宿坊やマニ輪舎が建ちならび、現地ではラマ僧が暮らしながら 修行 に励んでいます。この寺院は、近くに住むシェルパ人（16 世紀にチベットから移住し、ヤクの放牧や農耕を営みながら、ヒマラヤ越えの交易にも従事していた人びとで、最近は、登山ガイドとして有名です。）の信仰の中心になっています。



チベット仏教とは

インドにおこった仏教は、7 世紀ごろからヒンドゥー教やヨーガなどの影響を受けながら密教として発達しました。その後、チベットに取り入れられ、チベット仏教として今日まで受け継がれています。

◆ 五感を研ぎ澄まして修行する

チベット仏教の大きな特徴は、仏教の究極の目的である悟りの境地を生きた身で得ること（即身成仏）を目指すことです。そのため、真理を頭で理解するだけでなく、知覚、視覚、聴覚に訴えるものを使って修行に励みます。原色で描かれた仏画や曼荼羅、太鼓を鳴らしながら唱える読経などが、その特徴を表しています。曼荼羅は、世界(宇宙)の縮図です。修行僧たちは曼荼羅を目の前に見すえつつ、仏たちが作る世界を自分の心のなかに生み出すため修行に励みます。

◆ さまざまな仏たち

チベット仏教では非常に多様な仏の世界があり、数多くの仏が信仰されています。なかでも五仏(大日如来、阿しゅく如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来)と呼ばれる「如来」グループが重要な存在とされています。　*如来：すでに悟りを得た仏。

このほかに、おどろおどろしい姿をして日本人にあまりなじみのない「ヘールカ」と呼ばれる仏もいます。ヘールカは体が青く、象皮をはおり、手に頭蓋骨杯や生首などを持つ恐ろしい姿をしています。元々はヒンドゥー教の神（尊格）です。ほかにも菩薩、女神、護法神と呼ばれる男神も存在します。また、仏ではないが、チベット仏教では「祖師(ラマ)」が非常に重視されます。祖師は宗派の創立者です。

日本の密教は、6 世紀中頃に中国経由で伝わり、平安時代初期に空海らによって本格的に広まりました。チベット仏教は、インドから直接伝わった密教の流れをくむため、上記に述べたようなインド仏教後期の伝統が色濃く残っています。